

心で念仏することが重要であることをそれぞれ強調するわけであるが、言葉としては行が優先する形となっている。証空の立場は前の両者と違って、心に行が具するという思想が鮮明である。

いずれにしても念仏の行に、往生しようと思う心あるいは往生できると信じる心に三心が具すると言う。それについては諸師ともに共通する部分である。証空の場合はその思想から往生しようと思うことがまた、領解と言うことができ、そのときに三心が具わったときと解釈することができる。しかし、聖光の場合は三心が具すると信じて念仏することも、また必要であると言うこともできる。そう考えると三心が具する時期が最も早いのは、証空の思想とすることができ。しかし、そこで問題となるのが三心の退不退の問題あるいは念仏に帰したのちの生活であろう。これらの問題について諸師の思想を次に探ってみたい。

●第四節 三心の退不退と念仏生活

法然門下で三心の退不退を問題としているのは聖光である。聖光は行を行うことで心を守ると言い、三心が退く対応策を示していると言える。隆寛は他力に帰すことで入信し、証空は領解することで三心具足するのであるから、基本的に両者は三心の退不退は問題としないことがわかれる。

それでは三心具足ののちの行と生活の在り方を、それぞれの諸師はどう考えていたのであろうか。

聖光は一向専修の生活を提唱する。すなわち三心具足したあとも、行によつてより安心を強固なものにし、たとえそれが散心の念仏であつてもいつこうに差し支えないのである。

三心のうち回向発願心について、聖光は次の行為は障りとなるため慎まねばならないとする。

『西宗要』第二に、

所修念仏行以或自身息災延命願或壽命長遠願或福德願或勝也名聞願或恭敬養名聞願或所知所願願如此種種不定所求願是淨土回向發願心能障ナリ

〔淨全〕十、一六〇頁上

とあるごとくである。このように、ただ自らの往生のみを願つて念仏することが回向発願心なのである。

聖光の言う理想的な生き方とは、例えば『念仏名義集』巻中にあるように三心を知らなくとも寝ても目覚めても念仏して往生しようと思ひ怠らないような生活〔淨全〕十、三七二頁下〕であろうか。この人の安心はいわゆる横の三心であり自然に具しているものである。

隆寛は凡夫であるから散心の念仏しか称えることができないとする。それは妄念が起こつ

ても全く気にせず、ただ舌を動かすだけの念仏である。しかしそこに安心として、本願の念仏であるから必ず往生できると信じて、称えることが必要である。それができれば三心は自然と具すと言うのである。このような多念相続が必要であり、それが念仏行者の生き方であるとする。さらに隆寛は生き方の指標として多念相続の助業として、阿弥陀仏のためという条件付きで余行を正行に転嫁できるとしている。つまり、一向専念に帰すために出家するのであり、堂塔を建て仏像を造り道場を莊嚴することも、皆心を澄ませ行を整えようとするためであるから、皆阿弥陀仏のためであり雑行とはならないのである〔統浄〕九、一七下（八頁上）。これを拡大解釈すれば生き方として、多念相続は基調としながらもあらゆる日常の行動を阿弥陀仏のためと考えてすれば往生行と捉えることができる。この場合の安心はやはり他力に帰すと言う言葉に代表されるであろう。

証空は『女院御書』上巻に阿弥陀仏の他力の一行に帰命したあととは凡夫往生の行は退転することはないと明言（『西山上人短篇鈔物集』二二五頁）しており、念仏は自力を励まして相続するのではなく阿弥陀仏の他力の長時の行であると言う。領解したあとの行は他力本願の念仏として多い少ないということを問題にせず、色を付けずに念仏することが大切であるとするのである。この場合の安心も他力を仰ぐ心、すなわち他力に帰す心と言うことができる。証空は三福正因の立場から諸善を回向して往生行とすることができるとしているが、領解した心からは念仏という行だけが残りうると解釈していたと考えられることから、推定にすぎ

ないが生活そのものが念仏に帰すと考えていたのではあるまいか。

以上、諸師の理想的生活を考えてみたが、いずれの諸師も外見上念仏を多念相続する立場である。また阿弥陀仏の本願という他力を信じて念仏するという安心も基本的には変わりないということがわかった。またいずれの諸師の考え方も、救われるのは臨終に正念することであり、そこに至るまでの外見上の生活態度も大差はないと考えられる。以上のような考察に立って考えていくと最も異なるのは信の取り方であり、念仏行に帰すまでの道筋であることが明確となったのである。

おわりに

法然浄土教を志す者として最初にこのテーマを取り上げたのは、ひとえに『選擇集』撰述後の選擇をする必要があるからである。『選擇集』の前提は仏教を志す人が対象であった。したがって現代に生きるわれわれとしては当然、法然浄土教を信仰の対象とするためには、『選擇集』が前提としている思想世界に入り込むための選擇（『選擇集』以前の選擇）と『選擇集』以後に変化のあった仏教思想の選擇という二つの選擇を自らの心の中でしなくては、本当の